九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# メナルク像の継続と変遷 : アンドレ・ジッドとウージェーヌ・ルアール

小坂, 美樹
大阪大学 : 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/6632408

出版情報 : Stella. 41, pp.75-92, 2022-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

KYUSHU UNIVERSITY

# メナルク像の継続と変遷

## ――アンドレ・ジッドとウージェーヌ・ルアール――

小　坂　美　樹

「家族よ，私はお前を憎む」――『地の糧』第４の書においてメナルクは言い放つ[1)]。閉ざされた幸福を斥け，自由と快楽を求めるこの登場人物の姿勢は，作者ジッドの欲望と葛藤を鮮やかに映し出すものであった。

回想・日記・旅行記・詩などの多彩な文体が混然一体となった詩的散文『地の糧』のなかで，語り手はひたすらナタナエルに呼びかけ，彼のためだけに書く。それは「〔彼〕に近づき，〔彼〕に愛されたい」［NT, 354］がためだ。だが同時に語り手は，ただひとりの「未来の読者」［NT, 349］に命じる――

> 私の書いたものを読み終えたら，この本を捨て，そして外に出よ。〔…〕出ていくのは，どこからでもよい。君の町から，君の家族から，君の部屋から，君の考えから出ていくように。［NT, 349］

相手に近づきながらも，自分から離れることを要求する語り手。その複雑な言動こそ，彼がメナルクから受け継いだものである。語り手は述懐する――

> メナルクは危険だ。彼を恐れなければならない。彼は賢人からは非難されるが，子供からは恐れられない。彼は子供たちに，もはや自分の家族だけを愛するのではなく，徐々にそこから離れるよう教える。〔…〕ああ，メナルク，ともに別の道をもっと駆けめぐれただろうに。でも君は弱さを憎み，君から離れることを私に教えると言っていた。［NT, 354-355］

語り手は「メナルクは言っていた」と繰り返す。かつてメナルクから言われたことをナタナエルに「今，自分の名で再び言う」［NT, 379］。『地の糧』の中心はメナルクであり，ゆえに本書の題名を『メナルク』とすることもできたであろうと，語り手は明言する。しかし彼は，メナルクが「実在したことはない」

［NT, 349］と強調することも忘れない。メナルクは『地の糧』という虚構世界でのみ存在していたのだ。ところがジッドは，『地の糧』発表から間を置かず，友人フランシス・ジャムに「（他人によって語られる）メナルクの伝記を書いている」[2] ことを伝える。5年後の『背徳者』こそがこの企ての結実であり，そこに再び姿を現したメナルクは，またもや主人公（ミシェル）に既成のモラルや学問，家族をも捨て，強者の生命を全うせよと煽るのである。

ある作品の人物が同じ作者による別の作品に再登場することは，それ自体すでに興味深いが[3]，ジッドの場合さらに特異なのは，メナルクが『地の糧』から他作家による小説へと移ったのち，再び自作（『背徳者』）へと戻ってくることだ。他の作家とは，ウージェーヌ・ルアール。『地の糧』執筆・刊行当時，ジッドの最も親しい友人のひとりであった。その唯一の小説『主（あるじ）なき館』には，『地の糧』でジッドが描いたメナルクが登場する。クロード・マルタンの表現を借りれば，メナルクは「壁の外で（*extra muros*）」[4] でジッド文学を構成するのである。このような人物像の同一性と変遷については，ジッドの私設秘書を務めたイヴォンヌ・ダヴェが簡潔にまとめている――

> このメナルクという人物を，アンドレ・ジッドは，いくつか新たな特徴を備えたかたちで，1898年から1900年にかけて『レルミタージュ』誌に連載された文芸時評に再び登場させた。（それはつまり，ウージェーヌ・ルアールによる小説『主なき館』に言及した「アンジェルへの手紙」においてである）。さらにメナルク像は『背徳者』において重要な役割を担うことで完成されたのである。[5]

上記の作品を出版順に並べれば，『地の糧』（1897年），『主なき館』（1898年），「アンジェルへの手紙」（『レルミタージュ』1898年7月号），『背徳者』（1902年）となる。ただし，それぞれの執筆時期は重なりあい，両作家はともに自作品のアイデアを語り，助言を求め，草稿を読みあっていた。

当時のジッドとルアールの密接な関係については，すでに詳細な検討がなされており，『地の糧』と『主なき館』においてメナルク像が共有されたことは疑いを容れない[6]。しかし各々のメナルクの差異については，いまだ検討の余地が残されているのではないか。また，この人物像の変遷においては，ジャムの深い関与も考慮する必要があろう。そういった問題意識に立って本稿では，ジッドとルアール双方が描くメナルクについて，まずは先行研究にもとづき，その

共通項を抽出・確認する。続いて，ジッドがルアールやジャムと交わした往復書簡や，時事評論「アンジェルへの手紙」なども併せ参照しながら，当該各作品に見られる相違点に着目してメナルク像変遷の過程を明らかにしたい。

### メナルクの生成──『レルミタージュ』から『地の糧』へ

1895 年末，旅の記録などを書き留めたノートをもとに『地の糧』を準備中であったジッドは，文芸誌『レルミタージュ』の新編集長エドゥアール・デュコテの求めに応じ「メナルク（断章）」（以下「断章」）を書き上げた。メナルクが友人らを前に己の生い立ちや哲学を語るこの「断章」は翌年 1 月，同誌の巻頭を飾る[7]。マルセル・ドルーアン宛書簡にあるように，ジッド自身は寄稿テクストの出来に不満で，当初はこれを『地の糧』に組み入れる心算はなかったが[8]，結果的には，ほとんど手を加えず『地の糧』の中心部「第 4 の書」に配した[9]。他の部分とは明らかに文体を異にするものの，まさにこの処置によってメナルクの言葉は，語り手を介さず，ダイレクトなかたちで読者へと送られ，登場人物としての輪郭も一層鮮明に描き出されることになったのである。

メナルクはまず「放浪への熱い思い（ma fièvre vagabonde）」，「絶え間ない旅（les constantes mobilités）」そして「永遠の熱情（une éternelle ferveur）」を語る［M, 1］。五感に訴えかける自然の美しさに対置されるのは，旅のあいまに立ち寄るパリのアパルトマンの暗い冷たさ。その部屋は「静まりかえり」「閉め切られ」，澱んだ「重い空気」は「樟脳（camphre）」の匂いに満ちている［M, 4］。メナルクは「私は……を憎んだ」と繰り返す。家族，休息，倦怠が次々と憎しみの対象となる。18 歳で「広い場所」を求めて放浪するメナルクは，25 歳でいったんパリに戻り，長年アパルトマンにこもり最後の旅の準備を着々と進める。40 歳（『地の糧』では 50 歳）になったメナルクは，ため込んだ高価な品々をすべて売り払い，船を手に入れ，再び旅立つ。ヴェネツィア，コモ湖の別荘など各地で豪奢かつ官能的な生活を送り，一箇所にとどまることはない。そしてメナルクが友人らを前に長広舌をふるうのは，「フィエゾーレをのぞむフィレンチェの丘の上」［M, 7］と設定されている。

作者にとって「断章」の出来は納得のいくものではなかったが，ヴァレリーなど肯定的に評価する友人もいた[10]。いっぽうメナルクの特異かつ過激な思想は，当然ながら反発も避けられない。フランシス・ジャムの例を挙げよう。オ

ルテズの詩人は「メナルクの語り」に即座に反応し，2月7日付のジッド宛書簡でメナルクへの批判を繰り広げる[11]。詩人は立て続けに「メナルクへの返答」（以下「返答」）を『レルミタージュ』へ送る。この「手厳しい」[12]論考は，同誌4月号に掲載された[13]。冒頭は以下のとおり――

> 神から死を賜る今際のとき，私は，自分が愛した者たちと，メナルク，君のために微笑むだろう。
> 私が放浪の生活を送ることはないだろう，楽器の調べに魅せられることもない――私に聞こえるのは詩の朗誦のみ――豪奢なヴェネツィア美女たちを情婦にすることもないだろうし，先立つものがないのだから，船荷いっぱいの象牙や鳥，香料を手に入れることもないだろう。［RM, 225］

ジャムがここで自らの最期に思いを巡らせるのは，「断章」末尾にあるメナルクの一文「私はやすやすと死ぬだろう（je mourrai facilement）」［M, 7］に応えたものと考えられる。メナルクの豪奢と自分の素朴を対比させたうえで，自身の境遇を肯定し，相手を非難する，いかにもジャムらしい内容である。ここで詩人はメナルクに直接語りかけている。そればかりではない。さらにはメナルクと同時代の作家たちを同列に並べ，あたかもこの登場人物が実在しているかのように扱うのだ――

> 私が最期に見る幻のなかで，アンリ・ド・レニエには孔雀と鳩とバラの花をからませた糸杉を持ってきてほしい，ロチには蓮を，マラルメには百合と神秘の香を〔…〕そして，君，メナルク，川岸の牧人よ，君には苦くて子供じみたスコラ哲学の限りない優美さを持ってきてもらいたい。［RM, 225］

ジャムによる論考には「わが友ジッドへ」［RM, 225］と記されているので，詩人がメナルクを実在するかのように扱うのは，あくまで文学的技巧である。実際，ジッド宛書簡でジャムは，まだ直接に会ったことはないとはいえ，「返答」が強い親近感を抱いている友を傷つけるのではないかと怖れ，メナルクへの批判は「文学上の論争（tournoi littéraire）」[14]であるとわざわざ断っている。ジャムの気遣いはともかく，「返答」によって，『地の糧』で「実在しない」と宣言されたメナルクが，フィクションと現実の境界をこえて現れたことには留意しておきたい。

ジャムとは反対に，この「メナルクの語り」を創作の原動力としたのがウー

ジェーヌ・ルアールである。彼はジッドの友人であると同時に，ジャムとも親しかった。じじつ，ジッドがジャムを知ったのは，ルアールの仲立ちによるもの。ジャムの反応がきわめて迅速であったのに対して，ルアールは徐々にメナルクに惹かれていったようだ。2月23日付のジッド宛書簡でルアールは，「メナルク」を読み返し，「実に素晴らしい。はじめは心構えがまったくできておらず，どう評価してよいのかわからなかった」[15] と伝える。4月にも同断章を読み返したと認め，5月24日には，のちに『主なき館』となる小説の草案をジッドに送っている。そのわずか2日後の手紙でルアールは「今日ほど“メナルク”が素晴らしく思えることはない」[16] と賛辞を惜しまない。

ルアールのメナルクへの興味は数カ月で大きく変化する。そこにはジャムの「返答」が影響しているのではあるまいか。「断章」のメナルクは，「返答」を通過することで，あたかも実在の人物であるかのようにルアールを引きつけたのだろう。ルアールとジャムが当時，行動を共にしていた事実から（前者は，ジッド夫妻の新婚旅行先であるアルジェリアに後者を伴ってやってきた），また3者の密接かつ複雑な関係から，メナルクについてそれぞれが直接・間接に意見を交換し，思索を深めていったことは十分に考えられる。そうしたなかでルアールは滞っていた小説に再び取りかかったのである。

### ルアール『主なき館』

ウージェーヌ・ルアール（1872–1936）とジッドが知りあったのは1893年。両者ともまだ20代前半であった。若いふたりは文学への情熱を共有し，急速に親しくなる。ルアールはジッド同様，パリの裕福なブルジョワ家庭出身でありながら，その恵まれた環境に安住できない。3歳上の友への手紙には，人生の入り口で悩む彼の姿が見てとれる――

> オータンに住む決心をしたのは，重くのしかかる〔家族の〕影響から逃れるためだ。その地で貧しい牛飼いになるつもりだ。そのほうがずっといい，単にルアール家の息子の一人としてパリのあの世界にいるよりは。[17]

ルアールもやはり「家族を憎み」，そこから逃れようとする若者だったのである。後には農場経営，さらには政治の道を歩むことになるが，ジッドが『地の糧』を書き進めていた頃，彼もまた小説に取り組んでいた。その唯一の小説と

なる『主なき館』は，ジッドからの励ましと約5年の紆余曲折を経て1898年メルキュール・ド・フランスより刊行される。

同書に登場するメナルクも物語において重要な役割を担うのだが，さほど知られた作品ではないので，筋に沿ってこの登場人物の描かれ方を『地の糧』のメナルクと比較しながら検討しよう。

『主なき館』の主人公ローランは，2人の友人，ガブリエルとメナルクそれぞれとの関係を語る。物語前半では，ガブリエルとの友情，より正確には彼のローランへの限りない献身が描かれる。恋人を失い絶望するローランを見かねたガブリエルは，田舎にある自分の地所へ友を招く。ガブリエルの優しさと，彼の母親や婚約者による細やかな心遣いによりローランは癒され，心身ともに回復する。ガブリエルは，ローランに自分の土地の一部を与えるにとどまらず，親友と婚約者が愛しあっていると思い込み，ふたりを結婚させる。豊かな恵みをもたらす農地で妻子とともに安定した生活を送るローランに，ひとつの報せがもたらされる――

> こうしてまっとうに働き暮らしていたちょうどその時，メナルクのフランスへの帰国が新聞で報じられた。メナルクは探検旅行を終え，船荷いっぱいの財宝，自然の貴重な品々，骨董品や芸術品を持ち帰ってくるらしい。帰国に先立つ数日間，新聞は彼の話で持ち切りだった。どの記事にも，偉大な市民であり，活力あふれるメナルクの来歴が載り，彼が自身の莫大な財産を旅にささげ，祖国に富をもたらすとあった。[18)]

ようやく物語の半ばでメナルクが新聞記事というかたちで登場する。そこには『地の糧』同様，「旅（voyage）」や「富（richesse）」といった語が散見する。ただし，上記引用末にある国家への貢献は，ジッドのメナルクのものではない（この点については後述）。

ローランは，はじめこそメナルクとの再会を望まなかった。実のところ，久しくフランスを離れていた友をほとんど忘れていたのだ。ところが，メナルクを「手本（exemples）」［VSM, 77］として慕っていた青春時代を思い出すうちに，かつての親友のことが頭から離れなくなってしまう。結局，ローランは友を港まで迎えに行き，昔日の友情がよみがえる。物語の後半でローランは，ガブリエルにより与えられた家族，土地などあらゆるものを，メナルクとの再会をきっかけに捨てることになる。メナルクの本質は『地の糧』から何ら変わっ

ていない。彼は所有と定住を否定し，次の旅についてローランに話す。自分とは正反対の生活を送る親友と語りあうことでローランは，自分が所有するものが自由を妨げる軛（くびき）でしかないことに気づき，次第にそこから離れることを妄想しはじめる。

『地の糧』では，メナルクが物語の中央部で，自らの生い立ちと哲学を披露した。いっぽう『主なき館』の半ばで，メナルクを含む友人たちを前に長々と語るのはローランである。旅立つ友への惜別の辞として，ローランは，未知の海へ乗り出すメナルクと田舎の土地に根付く自分を対比する。この対比のレトリックは，ジャムが「返答」で用いたものであった。そしてジャム同様，ローランは，メナルクと自分の違いを強調しつつも，自分の選択は間違っていなかったと宣言し，友の帰還をここで待つと結ぶ。

本作についてアンリ・ゲオンは，「ジッドの影響は感じられるものの，それはすぐに消えてしまう（fugitive）」[19] と評するが，すぐに消えるどころではない。ローランの語りが，『地の糧』のメナルクの語りを下敷きにしていることは終始明示されているからだ。

旧友の新たな旅立ちを前に，まずローランは，最後に彼と会ったのが，「フィエゾーレをのぞむフィレンツェの丘の上」［VSM, 84］であったと述懐する。そこは『地の糧』でメナルクが長広舌をふるった場所と一字一句同じであり，冒頭から『主なき館』のメナルクと『地の糧』のメナルクが結びつけられる。またローランは，メナルクの生活を「放浪（vagabond, nomade）」と表現し，かつて彼が住んでいたパリのアパルトマンは「樟脳の匂いがした（ton appartement camphré）」［VSM, 86］と回顧する。両者の語りの末尾，いずれも自らの最期について語る箇所を比較しよう。まずは『地の糧』のメナルクから――

> 私の幸福が富のおかげだなどと思わないでほしい。この地上にいかなる絆も持たない私の心は貧しいままだ，そして私はやすやすと死ぬだろう。私の幸福は熱情でできている。区別なくあらゆるもの通じて，私は熱狂的に愛したのだ。［NT, 387］

次いで『主なき館』のローラン――

> 私の心は日々豊かになっている，友よ，しかしながら，思うに，私もまたやすやすと死ぬだろう〔…〕私の幸福は，君と同じように，熱情でできている，でもまた，優しさと控えめな愛情でもできているのだ。［VSM, 91］

双方ともほぼ同じ語句を用いるばかりでない。ローランは「私もまた」「君と同じように」と繰り返すが，『主なき館』でのメナルクはやすやすと死ぬことも，熱情のことも語ってはいない。ここでのローランは『地の糧』のメナルクに応えているのだ。

『地の糧』において（『主なき館』でもまた），メナルクが語る場所は「フィレンツェの丘の上」であった。この設定はジッドの実体験に基づくとされている。1894 年，ジッドは偶然その地でオスカー・ワイルドに再会し，彼が「年老いて，醜い」ながらも，相変わらず「素晴らしく話がうまい（extraordinaire conteur）」ことに魅了される[20]。ジッドを前に得々として語るワイルドの様子は，そのままメナルクの語りの口調に反映されているのであろう。『地の糧』にワイルドの名は記されておらず，この「フィレンツェの丘」を彼と結びつけるのは，伝記的な事実を確認してはじめて導かれる解釈である。いっぽう『主なき館』ではワイルドの存在はより具体的に示される。メナルクが旅立った後，残されたローランは，彼の家で会った男からの言葉を思い出す――

> 魅惑的なその男は，垂れ下がった分厚い唇の持ち主だった。〔…〕彼は私にむかって言った。「あなたの唇は気に入らない。まっすぐで，嘘をつくことができない唇だ。」――この男は間違っている，と私は思った。私は嘘をついていた。周囲の者たちに対して，旅立つ友に対して，そして何より自分自身に対して私は嘘をついていた。［VSM, 93］

この「嘘のつけない唇」とは，パリで文壇の寵児となっていたアイルランド人作家が若いジッドにかけた言葉に外ならない――

> あなたの唇は気に入らない。まっすぐで，一度も嘘を言ったことのない人間の唇だ。あなたに嘘をつくことを教えたい。その唇が美しくゆがむように。ちょうど古代の仮面の唇のようにね。[21]

ジッドがワイルドの死後に書いた賛辞が『レルミタージュ』に掲載されたのは 1902 年のことなので，それ以前からすでにルアールはこの逸話をジッドから直接聞いて知っていたのだ。ワイルドの言葉をそのまま使うことで，ルアールは，ワイルドはもちろん，ジッドの存在も浮かびあがらせることができる。さらには，「嘘をつけない唇」の持ち主をローランとし，またローランが多分に作者の分身として描かれていることを思えば，ローランとジッド，ひいては自身とジッ

ドを重ねていると言えよう。『主なき館』におけるジッドからの影響を自覚的に書き込んでいるのだ。

さらに，『主なき館』にはジャムの姿も見てとれる。ローランの語りにおける対比の論法がジャムのそれと同じであるばかりではない。ジャムは，ローランの友人のひとり，陽気な「詩人フランツ」［VSM, 83］として登場する。ジャムの場合は名前が少し変えてあるが，他の友人たち，「フェドール」（フェドール・ローゼンベルグ）や「アンブロワーズ」（ポール・アンブロワーズ・ヴァレリー）など，当時ルアールと親交の深かった人物の名前がそのまま用いられる［VSM, 89］。ちなみに「謎めいた村長ヴァロンタン・ノックス」［VSM, 83］はジッドを指す。ノックスは『パリュード』の登場人物で，ルアールは本書を作者より献じられている。そしてジッドは 1896 年にラ・ロック＝ベニャールの村長に選ばれたばかりであった。このようにルアールは，ジャムが「返答」で行ったのと同様に，実在の人物をメナルクの友人として作中に描き出したのである[22]。

以上のように，ジッドのメナルクとルアールのメナルクのつながりが確認できた。属性や発言，物語における役割など，2 作品のメナルクを同一視することに問題はないだろう。しかしながら両者のすべてが同じではありえない。きわめて似ているがゆえに，その違い，すなわちルアールの独自性はかえって際立つ。ルアールのメナルクがジッドのそれと異なるのは大きく 3 点。メナルクの国家への貢献，旅立ちの悲しみ，そして贈り物としてのナイフである。

まずは，メナルクの国家への貢献について 2 作品を比較しよう。家を出よ，町を出よ，自分の属するものから離れよと説く『地の糧』のメナルクには，国家への貢献などまったく相応しくない。メナルクのモデルのひとりがワイルドであることを鑑みればなおさらであろう。メナルクは所有も所属もしない旅人であり放浪者であった。ところが『主なき館』では，帰国を伝える新聞記事にあるように，彼の旅は「探検旅行（voyage d'exploration）」であり，「祖国に富をもたらす」ものだ［VSM, 77］。メナルク自身，「私は祖国のために幾度も命を懸けてきた」と語り，次の旅は今まで以上に危険な「遠征（expédition）」になると覚悟する［VSM, 80］。くわえてメナルクは，友人らを前に「この国〔フランス〕は死にかけている」［VSM, 81］と，ついには政治談議まではじめるのだ。

このように国家に奉仕するメナルクの造形には，作者の学友シャルル・ミシェル（シャルル・ミシェル＝クロ）の影響が指摘されている[23]。フランスの外地

（植民地）政策のもとマダガスカルやエチオピアで活躍し，さらにはクレディ・リヨネの理事となるミシェルの行動は国家への貢献そのものである。ルアールは，フランスを離れ異国を行き来するミシェルの活力にメナルク的なものを見出したのだろう。『主なき館』刊行後も，ジッド宛の書簡でミシェルを「私のメナルク」[24] と呼ぶほどだ。この探検家にルアールを介してジッドが初めて会ったのは 1893 年とされ，以降も幾度か会ってはいる。ミシェルの異国（特にマダガスカル）での体験談にはジッドも一定の興味を示したようだが，彼の言動が『地の糧』のメナルクに反映されることはなかった。ただし『背徳者』において，主人公の名がミシェル，また彼が魅了される農場の青年の名がシャルルであることは，検討の余地は大いにあるものの，記憶に留めておいてよいかもしれない。

次に『主なき館』で新たに加えられたメナルクの属性として，出発への悲しみがある。安住を嫌い，各地を移動するメナルクではあるが，ローランは旅立つ友の姿を「美しく贅を尽くしたいでたちではあるものの，すでに少し悲しげであった」［VSM, 83］と描写する。またメナルクは，出発を恐れるかのようにローランを引き留めようとし，いつもとは違う彼の「子供のような」［VSM, 81］態度はローランを驚かせる。さらにメナルクは，ローランとの友情の強さを示すためとはいえ，旅をやめることすら仄めかす――

> 私には冒険が必要だし，広々とした明るい場所がなくてはならない。けれど，時々フランスへ戻り，故郷に帰り，なじみの空のもとで眠り，私の手を君に再び握ってもらいたいと思う。わが友よ，たったひとりの真の友よ，君にだけ，私はまだこの地上で執着するものを打ち明けたのだ。［VSM, 92］

友情は愛しても，「誰かひとりに自分を捧げることはなく」［NT, 384］，また「この地上にいかなる絆も持たない」［NT, 387］『地の糧』のメナルクとはずいぶん違うメナルクの姿がここにはある。

そして最後にメナルクのナイフについて。『主なき館』のメナルクは，仮住まいの部屋を異国で集めた貴重な品々で飾っていたが，出発を前にそれらをすべて手放す。そのなかでメナルクは，ローランに美しく装飾された護身用ナイフを思い出の品として，なかば無理やり手渡す――

> 「何か私のものを君に持っていてほしい。少なくとも，これを受け取ってくれ」。彼〔メ

ナルク〕は内ポケットから，鞘に入ったナイフを取り出し，鞘から，美しく輝く刃を抜き出した。「これを受け取ってくれ。これは私の一部だ。ずっと肌身から離したことはない。私のために作られたもので，実によいものだ。何度もこれに救われたよ。相手を脅すものではないが，少なくとも私を危険から何度も守ってくれた。大切にしてくれ。身に着けてほしい。このナイフは，私を守ってくれたように，君を守ってくれるはずだ。」［VSM, 82］

メナルクは旅立った。残されたローランの心はすでに自分の土地や家族のもとにはない。田舎での安定した生活はローランにとってもはや束縛でしかなく，彼は精神的に追い詰められてゆく。荒むローランにガブリエルは変わらぬ優しさで接するものの，その気遣いはかえって彼を苛立たせるばかりだ。メナルクとともに旅立つこともできたと後悔の念に苛(さいな)まれるまさにその時，メナルクの船が満載の財宝とともに沈んだとの報せが届く。もはや旅立つ希望も永遠に失ったローランは，ついにメナルクのナイフで発作的にガブリエルを刺し殺してしまう。そして１年後，フランスを逃れたローランは，アフリカの砂漠で自らの行いを深く悔い改め，神による慰めを見出すのである。

こうしてローランの物語は終わる。海に沈んだメナルクがジッドの小説に再び現れるのは『背徳者』であるが，その前に，この旅人はジッドの評論にまた少し違った姿で登場する。

### メナルク再び――「アンジェルへの手紙」から『背徳者』へ

『主なき館』が 1898 年 5 月に刊行されるや，ジッドは本書を文芸時評で取りあげた。『レルミタージュ』同年 7 月号掲載の「アンジェルへの手紙」[25]（以下「手紙」）において，作家は架空の文通相手にむけ友人の著作を解説する。

ジッドはアンジェルに「あなたの友人ウージェーヌ・ルアールの本でメナルクの死を知った。彼のことが好きだったので，とても悲しい」［LA, 10］と述べる。続けてメナルクとの思い出を綴り，彼を物語の登場人物ではなく，旧知の友として提示する。メナルクを実在するかのように評したジャムの「返答」が想起されよう。じじつ，アンジェルがメナルクを知るのは「フランシス・ジャムが彼にあてた素晴らしい手紙」［LA, 10］を通してであると，「返答」についての言及もある。その辛辣な内容にもかかわらず，ジッドは「返答」を気に入った。メナルクを実在の人物として扱う詩人の手法もその理由のひとつであろう。

ジャムが始めた「文学論争（トーナメント）」での「遊び / ゲーム（jeu）」[26] をジッドは続けているのだ。

「手紙」でのジッドは，『主なき館』に現れたメナルクの姿に驚く――

> ふだん彼は，旅先から何も持ち帰らないと言っていたのだが，今回は，いつもと違い，仮の住まいをあからさまに豪華絢爛な品々で埋め尽くした。驚いたことに，〔…〕そこは家具，武器，宝石，とりわけ美しい織物であふれかえっていた。［LA, 11］

たしかに『地の糧』のメナルクもパリの自宅に高価な品を集めていた。しかし，それは次の旅の準備であって，室内装飾のためではない。メナルクはその富にもかかわらず「貧者のような身なりと暮らしをしていた」［LA, 11］のだから。またジッドは自分が生み出した登場人物が「政治について語る」［LA, 11］ことにも驚きを隠さない。ルアールのメナルクがジッドのメナルクを引き継いでいるのは先述のとおりだが，「手紙」においてジッドは，かつて自分が『地の糧』で描いたメナルクと『主なき館』の同名の登場人物との違いに驚いてみせることで，ルアールがこの登場人物に独自に加えた性質を浮き彫りにする。そして今度はジッドが，ルアールのメナルクに触発され，新たなメナルク像を創作しはじめる。「手紙」のメナルクは，『地の糧』『主なき館』の単なる延長ではない。そこには，すでに『背徳者』のメナルクが描かれているのである。

『主なき館』において，メナルクの住まいは異国の豪華な品々で飾られていた。ローランは，なかでも高価なペルシャ絨毯が訪れる人々に踏み汚されるのを嫌がった。いっぽう当のメナルクは，その様子を微笑みながら楽しんでいる。「手紙」でのメナルクはさらに，美しい布類を「最後まで汚してから，どこかの美術館に譲り渡す」［LA, 11］つもりだ。『背徳者』でも同様に，パリでのメナルクは，ホテルの部屋をネパールから持ち帰った高価な布で覆い，「美術館へ寄贈する前に，色をくすませる」[27]。またメナルクの口癖「後悔，呵責，悔悟〔…〕これらはかつての喜びを後ろから見たものだ」［LA, 10］は，ほぼそのまま『背徳者』でメナルクの口にのぼる［Im, 657］。

『レルミタージュ』に連載された「アンジェルへの手紙」は，1900 年に一冊にまとめられた[28]。その際かなりの修正や削除がほどこされたが，『主なき館』に関する部分は，位置を変えて載録された。ところが 3 年後の『プレテクスト』に，ルアールの小説にふれた箇所は見あたらない[29]。以降『全集』に一部のみ

が採られた以外[30]，『レルミタージュ』初出の完全なかたちで読めるのは1999年のプレイアッド版『批評エッセイ集（*Essais critiques*）』まで待たねばならない。時評という性質上，時間の経過にともなう修正や削除は必然ではあるが，『主なき館』を論じた「手紙」が1903年に消えたことと，『背徳者』の刊行が1902年であることは無関係ではあるまい。『背徳者』と『主なき館』の強い関わりを「隠蔽する」[31]とまでは言えないが，「手紙」を（少なくともメナルクについては）『背徳者』の草稿と捉えれば，作品刊行後に公にする必要はない。こうして「手紙」に描かれたメナルクは，『主なき館』の解説というコンテクストを離れて，『背徳者』に再び登場するのである。

『背徳者』のメナルクはどのような姿で現れるのだろうか。『地の糧』『主なき館』同様，メナルクが登場するのは同書においても，物語のちょうど真ん中（3部構成中の第2部）である[32]。久しぶりに再会したミシェルにむかって，メナルクは自分の哲学を披露する――

> 私にはそれ〔所有の感覚〕がほとんどない。ここを見たまえ。自分のものなど何もない。〔…〕私は休息が大嫌いだ。所有は休息につながる。安心すると，人は眠り込む。〔…〕私は自分の富に囲まれながらも，それが仮そめであると意識することで，人生を激しく掻きたてたい，少なくとも昂揚させたい。危険を好むとは言わないが，波乱に富んだ生き方が好きなのだ〔…〕。［Im, 650］

この発言が示すように，所有や家庭を否定するメナルクの態度は『地の糧』から変わらない。また，メナルクの背後にうかがわれるオスカー・ワイルドの姿も具体的に表現される――

> 最近，おろかで，恥ずべき裁判が起こしたスキャンダルは，あらゆる新聞記事にとって，彼〔メナルク〕の評判を汚すおあつらえむきの機会となった。［Im, 647］

ワイルドの裁判と処罰に続く死が1900年であることを考えれば，当時の読者に説明は不要であったろう。さらにミシェルは，人々の前でメナルクに近づき「親しみを込めて抱きしめた」［Im, 647］。

もちろん『地の糧』のメナルクがそのまま『背徳者』へと移ってきたわけではない。『主なき館』のメナルクに見られた国家への貢献を『背徳者』のメナルクも受け継ぐ。ミシェルがメナルクの任務を知るのは，ここでもやはり新聞記

事を通してである――

> 今朝，植民地省がメナルクに課した新たな任務について知った。様々な新聞が，つい先日まで卑劣にも彼を貶めたことなど忘れたかのように，彼の冒険にみちた生涯についての記事をのせた。〔…〕新聞は競いあうように，メナルクが今までの探検から持ち帰った珍しい発見によって国家そして人類全体へ貢献したと大袈裟に書いていた。［Im, 652］

また『背徳者』のメナルクには，『主なき館』のメナルク同様，旅立ちを前に迷いが生じる。冒険家は，次の旅はより危険なものとなるので，出発の前夜は「いつも恐ろしいほど不安だ」［Im, 654］と告白し，最後の夜をともに過ごしてほしいとミシェルに頼む。その夜にも，彼は「選ばなければならない。大事なのは，自分の欲しいものを知ることだ……」［Im, 656］とつぶやく。ミシェルに出発したくないのかと尋ねられても，メナルクは否定しない。選択を拒否し［NT, 379］，旅への不安も迷いもなかった『地の糧』のメナルクを思い出そう。『主なき館』を経由することで，『地の糧』のメナルクは大きく変わったことが見てとれよう。

ルアールが『地の糧』のメナルクに独自に加えた，国家への貢献，出発への不安は，『背徳者』のメナルクに引き継がれた。『主なき館』でメナルクがローランに渡したナイフもまた同様だろうか。

『背徳者』においても，メナルクはミシェルに刃物を手渡す。それはミシェル夫妻がビスクラ滞在中に出会った現地の少年モクティールが，妻マルスリーヌからこっそり盗んだ「ハサミ」である。この刃物は，ミシェルの自己解放に重要な役割を果たすが，『主なき館』のナイフを受け継いでいるとは断じがたい。なぜなら，このハサミはメナルクのものではなく，『主なき館』のナイフのようにローランとメナルクを結びつけるものではないこと。またローランの美しいナイフとは異なり，「形がくずれ，錆が浮き，刃先は欠け，ゆがんで」［Im, 649］いること。さらにこのハサミは物理的には誰も傷つけないからだ。むしろナイフに付随する血のイメージは，『背徳者』に描かれる別の現地の少年バシールのナイフにつながるのではないか。バシールは，ミシェルの目の前で木片をナイフで削って遊んでいる最中，うっかり親指を切り鮮血を流すからだ。あるいは，ローランのナイフによって流された血は，ミシェルの喀血，マルスリーヌの流

産といった死と直結する場面に分散されているとも考えられよう。『背徳者』のメナルクが『主なき館』のメナルクから多くを受け継いでいるのは間違いないとしても，それは単純な模倣ではない。ルアールのアイデアを引き継ぎながらも，ジッドはそこからさらに新たな場面を作り出すのである。『背徳者』のメナルクは，その本質を保ちながらも，様々な点で『地の糧』のメナルクとは異なる。この登場人物の変化に作家自身は満足しているようだ。というのも後の日記にジッドは，『レルミタージュ』掲載当時のことを回想しつつ，「メナルクの姿は，『背徳者』において〔『地の糧』よりも〕一層よく描かれている」[33] と記しているからである。

## 結　語

以上，『レルミタージュ』に現れてから『背徳者』に至るまでのメナルク像の変遷を追った。その変遷は，ジャムやルアールとの関わりのなかで，この登場人物が徐々にはっきりとした輪郭を備えながら成長してゆく軌跡でもある。メナルクの造形における『主なき館』の重要性はあらためて強調してよいだろう。ルアールにジッドからの助言が必要だったのは事実だが，それは一方的なものではなく，ルアールのメナルクもまたジッドのメナルクに大きく関与し，両作家の関係は「相互浸透（osmose）」[34] とさえ言えるものであった。またメナルクの変遷の過程においてジッドは，自身が生み出した登場人物の本質を守りながらも，他作品・他作家からの影響を柔軟に受け入れる。このようにメナルクという登場人物の継続と変遷からは，ジッドの創作のありようが垣間見られるのである。

## 註

1）André Gide, *Les Nourritures terrestres*, in *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, 2 vol. Édition publiée sous la direction de Pierre Masson, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, t. I, p. 382.『地の糧』からの引用は，本文中で作品名の略号 NT と上記の版からの頁数を示す。各引用の日本語訳はすべて既訳を参考にしたうえでの拙訳。『地の糧』の重要な関連作として本稿が比較検討の対象とするウージェーヌ・ルアール『主（あるじ）なき館』（レフェランスは後註 18 を参照）は未だ日本語に翻訳されていない。このため本文中の引用はすべて拙訳による。

2）André Gide, Francis Jammes, *Correspondance*, t. I［*1893-1899*］, Paris : Gallimard,

coll. « Cahiers André Gide » n° 21, 2014, p. 256（lettre à Jammes du 28 ou 29 août 1897）.

3）単に名前だけを問題にするのであれば，メナルクという名の登場人物は『パリュード』にも『鎖を離れたプロメテウス』にも登場する。本稿が着目するのは，むしろ同名の登場人物が物語において果たす役割の同一性である。

4）Claude MARTIN, *La Maturité d'André Gide : de « Paludes » à « L'Immoraliste » (1895-1902)*, Paris : Klincksieck, 1977, p. 227. ジッドの「壁の外の文学」として，マルタンは『主なき館』のほかに，アンドレ・リュイテルス『アルミッドの庭』を挙げる。たしかに同書にもメナルクという人物が登場し，ある種の冒険に巻き込まれるが，『地の糧』と『主なき館』のような強い結びつきは見られないため，今回は検討の対象としない。

5）Yvonne DAVET, *Autour des « Nourritures terrestres » : Histoire d'un livre*, Paris : Gallimard, 1948, p. 83, note 2.

6）Voir, par exemple, Claude MARTIN, *La Maturité d'André Gide*, *op. cit.*, p. 290 ; André GIDE - Eugène ROUART, *Correspondance I, 1893-1901*. Édition établie, présentée et annotée par David H. WALKER, Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 2006, pp. 54-74. また以下は，『地の糧』のメナルクを起点として，ジッド文学全般にわたって現れるメナルク的なものについて考察した修士論文―― Ralph SCIANNAMBLO, *Signification et portée du personnage de Ménalque chez Gide*, thèse présentée à McGill University（Montréal）, mars 1983.

7）Voir André GIDE, « Ménalque（fragment）», *L'Ermitage*, janvier 1896, pp. 1-7. 本文中では引用箇所を作品の略号Mと頁数で示す。

8）Voir André GIDE - Marcel DROUIN, *Correspondance 1890-1943*. Édition établie, présentée et annotée par Nicolas DROUIN, Paris : Gallimard, 2019, p. 230（lettre à Drouin des 11-12 et 14 février 1896）.

9）ダヴェは「メナルクの語り」を『地の糧』の中心紋ととらえる（voir Y. DAVET, *op. cit.*, p. 86）。この解釈はほぼ定説化しているが，異論もなくはない。また「断章」が『地の糧』に取り込まれるにあたっては，いくつかの変更が施されている。「メナルク」の異文については以下を参照―― David A. STEEL, « Deux textes du "Récit de Ménalque" », *André Gide* n° 2 [sur *Les Nourritures terrestres*], Paris : La Revue des Lettres modernes, 1971, pp. 25-34.

10）Voir André GIDE - Paul VALÉRY, *Correspondance 1890-1942*, Paris : Gallimard, coll. « Cahiers André Gide » n° 20, 2009, p. 377（lettre à Valéry du 24 janvier 1896）.

11）Voir GIDE - JAMMES, *Correspondance*, t. I [*1893-1899*], *op. cit.*, pp. 114-116（lettre de Jammes du 7 février 1896）.

12）*Ibid.*, p. 118（lettre de Jammes du 21 février 1896）.

13）Voir Francis JAMMES, « Réponse à Ménalque », *L'Ermitage*, avril 1896, pp. 225-

228. 本文中では引用箇所を作品の略号 RM と頁数で示す。

14）Gide - Jammes, *Correspondance*, t. I［*1893-1899*］, *op. cit.*, p. 118（lettre précitée de Jammes du 21 février 1896）. この「論争」は媒体を変えて続く―― voir Jammes, « En faveur de la simplicité chrétienne. Lettre à Ménalque sur *Les Nourritures terrestres* », *Le Spectateur catholique*, juillet 1897, pp. 51-52 ; Gide, « Réponse à la lettre du Faune », *ibid.*, septembre 1897, pp. 141-142.

15）Gide - Rouart, *Correspondance I, 1893-1901*, *op. cit.*, p. 323. ルアールの心構えについて，彼は「断章」に少年愛がほのめかされていることに困惑したのではないかと，ウォーカーは推測する（voir *ibid.*, p. 59［Introduction］）。

16）*Ibid.*, p. 340.

17）*Ibid.*, p. 412（lettre de Rouart du 25 septembre 1897）. ここでは具体的にルアールの弟ルイが話題に上っている。

18）Eugène Rouart, *La Villa sans maître*. Préface de David H. Walker, Paris : Mercure de France, 2007, p. 77. 本文中では引用箇所を作品の略号 VSM と頁数で示す。

19）Henri Ghéon, « Les Livres de prose », *L'Ermitage*, juillet 1898, p. 71.

20）André Gide, *Correspondance avec sa mère 1880-1895*. Édition établie, présentée et annotée par Claude Martin, Paris : Gallimard, 1988, p. 382（lettre de Gide du 28 mai 1894）.

21）André Gide, « Oscar Wilde », in *Essais critiques*. Édition présentée, établie et annotée par Pierre Masson, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1999, p. 840.

22）虚構作品のなかに，実在する（しかもごく身近な）人物の名を書き込むことは，すでにジッドが「断章」で行っている。「断章」でメナルクの友人ミルティルはルアールを指すとされている。この名はジッドとルアールの書簡に一度だけ出てくるが，なぜミルティルなのかは今のところ不詳。

23）Voir Gide - Rouart, *Correspondance I, 1893-1901*, *op. cit.*, pp. 56-61.

24）*Ibid.*, p. 490（lettre de Rouart du 27 septembre 1898）.

25）Voir André Gide, *Lettre à Angèle*［I］, in *Essais critiques*, *op. cit.*, pp. 8-14. 本文中では引用箇所を作品の略号 LA と頁数で示す。なお，ジッドが手紙による批評という独自の形式によって批評と自分語りの両立を可能にしたことについては，以下を参照―― Pierre Lachasse, « Les *Lettres à Angèle*. Discours critique et écriture de soi », in *André Gide et l'écriture de soi*, Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 2002, pp. 73-88.

26）André Gide, *Lettre à Angèle*［I］, in *Essais critiques*, *op. cit.*, p. 959（notes par Pierre Masson）.

27）André Gide, *L'Immoraliste*, in *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, *op. cit.*, p. 648.『背徳者』からの引用は，本文中で作品名の略号 Im と上記の版から

の頁数を示す。

28) Voir André GIDE, *Lettres à Angèle*, Paris : Mercure de France, 1900.

29) Voir André GIDE, *Prétextes*, Paris : Mercure de France, 1903.

30) Voir *Œuvres complètes d'André Gide*, 15 vol., Paris : NRF, t. II [1933], pp. IX-XI.

31) André GIDE, *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, *op. cit.*, p. 1374 (notice par Pierre MASSON).

32) Voir Claude DESSALLES, « Ménalque », *André Gide* n° 2, *op. cit.*, p. 61, note 21.

33) André GIDE, *Journal II, 1926-1950*. Édition établie, présentée et annotée par Martine SAGAERT, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1997, p. 489 (24 mars 1935).

34) André GIDE, *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, *op. cit.*, p. 1371.